

2025年度青山学院大学一般選抜（個別学部日程）

教育人間科学部心理学科

小論文

【記述式問題】

〈出題の意図・ねらい、入学者に求める力〉

日本語の文章を論理的に読み解き、その理解に基づいて、自分の考えを適切な表現で展開できる能力が求められる。また、人の心や社会問題に対する関心および知識を持っているかを問う。提示されたデータから情報を読み取り、その情報および自分の知識に基づいて論理的に考える力があるかを判断する。

【設問 I】

設問 I の意図・ねらいは、問題文の読解に基づいて、文章全体の要旨を把握できているか、論理展開が再現できるか、筆者の意図を的確に抽出できるか、問題文の要求に基づく思考を経由して適切な答えを導き出せるか、文章内容を応用する形で自分の考えを（単なる感想や意見ではない思考を）正確な日本語で記せるかなどを、字数制限のある記述式の問題によって判定することである。

設問 I は、背理法を用いた証明のサンプルを素材にして、論理的思考力、問いを発見し展開する力、文章構成力などを問う問題である。

問 1 は「背理法」という名称を問う知識問題である。

問 2 で重要な点は、証明のサンプルを、書いてあるとおりに単に「理解」するだけでは足りないということである。「仮定から矛盾に至り、その仮定を否定する」というプロセスについての一般的な理解を踏まえた上で、もう一步踏み込んで、自分なりの「疑問（問い）」を、そこに発見する必要がある。しかも、疑問（問い）は提示されるだけでなく、展開され、解決の方向性を示すことも求められている。その全体を字数制限内でまとめ、適切な日本語で表現することが求められている。

解答例 以下は標準的な解答例であり、別解がある場合があります。

問 1

背理法（帰謬法）

問 2

なぜこれが証明になるのかについて、私ははじめは疑問を感じた。しかし、さらに考えることで、その疑問を自分なりに解決し、証明についての理解を深めることができた。以下に、その過程を述べる。この証明方法では、証明したい結論（ $\sqrt{2}$ は無理数である）の否定（ $\sqrt{2}$ は無理数ではない、すなわち有理数である）を仮定することで始まり、そこから矛盾（その有理数は偶数でありかつ偶数ではない＝偶数かつ奇数）という不合理を導いた。そして、その不合理を避けるためには最初の仮定を否定すればよいと考えることで、仮定の否定を証明する。しかしそもそも、なぜ矛盾は不合理であり、避けられるべきものなのか。その点に疑問を抱いた。そこで、矛盾について再考してみた。矛盾が不合理であるのは、偶数である／偶数ではない＝奇数であるという肯定と否定は、同時には成り立たず、必ずそのどちらかであることが合理的であると考えたからに他ならない。必ず肯定か否定のどちらかであり、肯定+否定で全てという「肯定+否定＝全体」を合理的とする思考が、この証明の前提になっている。もし偶数でも奇数でもない数（肯定でも否定でもないもの）を容認するならば、証明の前提は崩れて証明は成立しなくなる。また、 $\sqrt{2}$ は有理数か無理数かのどちらかであるという同様の隠れた前提が、最初の仮定の背後で働いている。この証明には、そのような暗黙の前提が必要であることが、理解できた。

【設問Ⅱ】

設問Ⅱでは、「令和5年版情報通信白書」（総務省）に掲載された、オンライン上での情報取得に関する調査の回答を分析・考察し、制限字数内で論述する能力を判定する。

問1では、2つの図から読み取れることを記述し、そこから推測される問題を指摘することが求められる。日本と他国の比較を複数項目において行い、かつ年代による違いを読み取る必要があり、情報を整理し的確に記述する能力が求められる。理解度を判断する基準としては、調査から読みとれる日本の情報収集の特異性について適切に抽出できているか、年代による違いについて言及しているか、読み取った内容から問題を論理的に指摘できているか、などが挙げられる。

問2では、問1で指摘した問題を解決するために、20代と50代の各年代の人に向けて、誰が何をどのように伝えるとよいかを、論理的に考え、提案する能力が問われる。「誰が」という主体については自由に設定できるが、たとえば、メディア、政府、学校などが挙げられる。論点の例として、対象となる年代ごとに異なるメディアを介して、それぞれの問題を周知する方法を考えることなどがある。データの理解度だけでなく、社会についての知識や関心の程度も判定することがねらいである。